

〔共同研究：大学教育における和泉市の地域資源の掘り起こし・保存・活用の研究〕

## 日本仏教揺籃の地としての南大阪（一） 仏並（ぶつなみ）

梅 山 秀 幸

### 【はじめに】

そのお屋敷の表札に私の目はくぎ付けになった。夢を見ているのではないかとさえ思った。その体験がこの論考の発端となる。

随筆めいた書き出しになるのをお許しいただきたい。

冬のある日、自由になる一日があって、朝起きて、槇尾山施福寺に参ろうと思い立った。特に西国三十三か所詣でを目指したことはないものの、数十年も関西に住みつけば、すでに二十数か所の観音霊場はまわっているはずである。満願成就などと意図しないうちに、いつか三十三か所すべてを参りつくす日が来るかもしれないし、すべてを廻り尽くせば、巡礼を行ったいにしえ人の心のありようのいくばくかは追体験できるかもしれない。また讃岐から都に出て大学の学生として学んだ空海は十八歳で儒・道・仏の正確な理解に立って『三教指帰』を書いた後、石淵の勸操に導かれてこの槇尾山の施福寺で髪を下ろして得度したという。中国に渡って密教の龐大な経巻と教えそのものを携えて帰国した後も、大宰府に足止めをくらった上、近畿にもどっても都にはなかなか上らず、太政官符が和泉国司宛てに下って上京が強制されるまで、空海は施福寺に滞留したと考えられている。一躍雄飛して八面六臂の活躍をするようになる以前の空海はこの山中に雌伏しながら何を考えていたのだろうか。

そうした歴史的にも重要なお寺が勤務している大学のある和泉市内にあるのに、なかなか足を延ばす機会がないままである。和泉中央駅からバスがあることはわかっていたから、半日くらいの時間つぶしにはなるだろうと思って出かけたのだった。ところが、バスの終点の「槇尾山入口」から、思いのほかに歩かされることになる。数キロを東槇尾川に沿って歩き、土産物店のあるふもとまで着いて、やっとのことでたどり着いたと思うと、そこで終わるわけではなかった。そこからさらに険しい山を登らなければならない。冬の平日で参拝客は少なかったものの、マイカーで来ていた人たちがいて、「那智も古道を歩けばたいへんやけど、上まで車で行けるしな」とか、「上醍醐とどちらがしんどいやろ」とか、話をしながら登って行く。空海の髪堂などを確認しながら、やっとのことで山頂に至って、観音さまにお参り

をして、膝が笑うような状態で下山したものの、そこからまた歩いて来たバス停留所までの道を引き返さなければならないのだった。もちろん、巡礼という宗教行為がその行程の苦難にこそ本質的な意味合いがあるとすれば、このくらいの歩行で音を上げていては埒もないのだが。

「横尾山入口」のバス停で、帰りのバスを待ったものの、なかなかやって来ない。和泉から父鬼に抜け、さらには和歌山に至ることもできる街道筋であり、父鬼川の兩岸には向かい合うようにして城塞ともいえそうな立派な石垣を積んだお屋敷もある。古い家々の並ぶ「仏並」の集落に「横尾山入口」のバス停はあった。そして、バスを待っているあいだ、ぼんやりと集落の中を歩いていると、そこの一軒のお屋敷の表札に「池辺」とあったのである。さらに、あたりには数軒の同姓の家がある。こんなことがありうるのだろうか。バス停の前には小高い山があって、そこにあるのが「仏並寺」であるらしい。なんとということであろう。書物の上だけで理解しているつもりになっていた1500年も前の日本仏教史の最初の重大事件がこの小さな集落にそのまま冷凍されたかのように保存されていたのである。今はひっそりと目立たないこの小さな「仏並寺」は日本で最も古い由緒をもつ寺の一つであり、その下に住まう池辺氏も日本の仏教受容史の上で大きな役割を担った人物の名前だったはずである。その末裔の方がたが歴史の舞台であったその場所に十数世紀を経て今なお住み続けていらっしやる。

それこそ仏教は世の無常をいい、不変のものは何もないかのようであり、日本の社会は歴史上の激しい転変を幾度も経験したかのように見える。しかし、その実、極東の島国である日本は容赦ない外敵の侵入もなかったせいも、数十代にもわたって一つの家の存続を許す持続性があるようなのである。十年一日の如しというけれど、千年一日の如しといっても、まだ言い足りない。それを実際に目のあたりにしていることになる。

## 【第一章】 さらに遡る過去

和歌山と大阪を隔てる和泉山脈にはそれほど高山はなく、和泉地方では大阪湾に向かってなだらかな傾斜がつづくものの、前山がいくつかあって、それを縫って流れる小さな河川をさかのぼっていくとき、まるで奥深い山間に分け入っていくかのような錯覚に陥ってしまう。横尾川に沿って池田谷を遡り、「納花」という仏のうけに花を手向けるおくゆかしい行為をそのまま土地の名にした集落を過ぎ、和泉国分寺のあった国分峠を経て横山谷に入っていくと、横尾川が父鬼川と東横尾川の二つの支流に分かれるところに仏並はある。

しかし、このあたりには、仏並という名前がつくはるか以前からすでに人びとの営みがあったようなのである。地域社会の持続性は実は1500年どころの話ではなく、その数倍の年月を考えていいのかもしれない。

『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』によれば、関西新空港建設にともなって、大阪府南部の道路の整備が行われ、外環状線がこの横山谷を通ることになって、その建設に先だっ

て調査が行われた。事前調査の段階では、この地域は弥生時代から古代・中世にかけての遺物の散布地くらいにしか考えられていなかったそうなのだが、1985年、大阪府埋蔵文化財協会が本格的な調査を開始すると、地下50センチほどのところから縄文土器が見つかり、さらに調査の進行にともない、竪穴住居や土坑も調査範囲のいたるところで見つかったという。一般的に縄文文化は中部山岳地帯から関東、東北に豊かな遺跡を残しているとされるが、この仏並では近畿地方では非常に珍しい縄文時代の遺跡の姿が明らかになったことになる。発見された土器は今から8000年前の縄文時代早期のものから、4000年以前の縄文後期までのものまであり、長いあいだ続いたかなり大きな集落がこの地にはあったことが判明した。さらには、近畿地方では初めてという土面も発見されたという。



仏並土面(大阪府文化財センター提供)

さらに、1993年には旧国道170号線と外環状線の交わるところにガソリンスタンドが建設されることになって、和泉市教育委員会が発掘調査したところ、ここでも縄文時代中期から後期の遺構や遺物が発見された。常識的な理解になるが、縄文時代の人びとにとっては平野部よりも山間部の方が生活環境として適していたのであろう。和泉市には槇尾川下流の平野部に池上曾根遺跡があって弥生博物館があるのだが、槇尾川上流の山間には仏並遺跡があり、縄文博物館があってしかるべきだといっているほどの貴重な遺跡だといえそうである。土器については、関東地方系の土器も見つかって、当時の広範な交流のあり方も明らかになり、その後、縄文時代後期の土面がさらに二面発掘された。土面は宗教祭祀に際してシャーマンが用いたものと考えられる。弥生時代の人びとの営みは平野部で主として展開され、そこでは農耕を主眼にした宗教祭祀に移行するのかも知れない。池上曾根の弥生博物館で入場者に弥生時代の宗教のありようを印象づけるのが鳥形だとすれば、この山間部に伝えられたはずの縄文時代の宗教のありようはこの仮面（ペルソナ）に集約されるように思われる。それはまた、中沢新一流のアースダイバー的思考が許されるならば、仏並を含む横山谷における



(国土地理院 1/20万地図により著者が作図  
紙面の都合によりさらに縮小してある)

仏の受容、正確にいえば、仏像（アイドル）崇拝にもつながる古層の文化であるような印象を受ける。

## 【第二章】 仏並という土地と池辺氏

さて、仏並という地名について、『日本歴史地名大系28 大阪府の地名2』（平凡社）は次のように記す。

ぶつなみ  
仏並村 ㊦和泉市仏並町

国分村の南にあり、父鬼川ちちおにが流れる。小村に大畠おぼたけ（畑）村・小川村おがわがある。地名は、当地池辺氏の祖先池辺直氷田が蘇我馬子から授けられた二体の仏像を私宅の仏殿に安置したことから起こったという（大阪府全志）。慶長十年（1605）の和泉国絵図には、当村所在地辺りに「仏阿弥陀村」村が二村描かれている。仏並は仏阿弥陀の転訛であろう。（中略）当地の男乃宇土神社は式内社、寺院は高野山真言宗仏並寺・福德寺がある。仏並寺は池辺直氷田が営んだ仏殿が起源と伝える（大阪府全志）。

また『日本地名大辞典 大阪府』（角川書店）には次のように記されている。

ぶつなみ 仏並<和泉市>

横尾山の北西、父鬼川流域に位置する。地名は、池辺直氷田が蘇我馬子から授けられた仏

像二体を私仏殿に安置したことにちなむという（全志5）。地内の佐々木台は、鎌倉期の横山荘の地頭であった佐々木高綱の屋敷跡と伝える。「延喜式」神名帳に見える「男乃宇刀神社」2座のうち1つがある。（中略）神社は男乃宇刀神社があり、上の宮とも称されている。寺院は、男乃宇刀神社の別当寺で佐々木氏の菩提寺であったという常願寺のほか、真言宗仏並寺・福德寺がある。仏並寺は泉州三十三か所2番札所でもある。（後略）

こちらではもう一つ興味を引く記述がある。佐々木高綱がこの地の地頭であったという。実際に確認できるのは、高綱の甥の信綱が横山郷の地頭職であったことだが（『和泉市史第一巻』）、高綱といえば、『平家物語』の宇治川の先陣争いのヒーローであり、また信綱も同じように後の承久の変において宇治川で戦功を揚げている。それによる混同なのかもしれないが、高綱の方はまた『鎌倉三代記』や『近江源氏先陣館』といった大衆演劇のヒーローでもある。江戸時代の人形浄瑠璃や歌舞伎では徳川家康に敵対した真田幸村を実名のまま取り上げることができず、近松半二は時代を過去に遡らせるという常套手段をとって佐々木高綱のこととして真田幸村を描いたに過ぎないとしても、佐々木高綱という颯爽たる武士の時代のヒーローも、しかし別の立場から見れば相貌を変え、侵犯者としての側面をもつはずである。ここでは立ち入らないが、高綱であれ、信綱であれ、鎌倉から横山郷の地頭職に任じられた佐々木氏は既存の寺社勢力である横尾山施福寺とは大きな摩擦を起こしたはずであり、ここ横山谷でもけっして歓迎された人物ではなかったと思われる。その菩提寺であったという常願寺は廃仏毀釈のために残らない。男乃宇土神社は仏並寺のすぐ近くにある。ヲノウトという、ヲは尾根を意味し、ウト、ウトー、あるいはウツは狭い谷、低くて小さい谷、袋状の谷、せまい峠道などを指す（鏡味完二・鏡味明克『地名の語源』角川 1977）。地形的にこの語源解釈でいいと思われる。この神社は『延喜式』にも記された古社であり、神武天皇の兄のイツセノミコトを祭るというが、この山間の聖地であり続け、人びとの魂の拠り所であったといえよう。また縄文時代の土面を使った祭祀ともかかわる場所であったといって、必ずしも的外れではないように思われる。それが仏並寺とは境界を接してある、あるいは同じ場所にある。

さて、これら二つの地名辞書の記述は『大阪府全志』の記述をもとにしていることになるが、その『大阪府全志』の記事というのは次のようなものである。

#### （仏並寺）

仏並寺は字上の垣外にあり、天王山と号し、真言宗高野派蓮上院末にして阿弥陀仏を本尊とす。本尊仏像は優秀の彫刻なり。縁起に依れば、欽明天皇十三年百濟国より仏法伝わり、蘇我氏敬信し、蘇我馬子は仏像二軀及び尼三人を池辺直氷田に授けしかば、氷田は受けて私宅の辺に営みし仏殿に其の二仏を安置し、其の子徳那更に弥勒観自在を安置したるもの即ち当寺の起源にして、村名も是れより起れりといふ。池辺直氷田は本地池辺氏の祖

なり。境内は二百七十六坪を有し、本尊兼庫裏・鍾樓を存す。

この『大阪府全史』で「縁起に依れば」という「縁起」は書物を指すのだろうか、この地での云い伝えといった程度のことをいうのだろうか。ここには「徳那」という氷田の息子が出て来て、また弥勒菩薩と観音菩薩の二仏が並べて奉安されたので仏並寺というのだということにしてある。平凡社の『歴史地名大系』では「仏並」は「仏阿弥陀」の転訛であるとしていた。仏並寺でいただいた『和泉西国 観音霊場巡拝案内』というパンフレットでは次のように紹介されている。『大阪府全志』と同じ記述があり、仏並寺に伝わる伝承がある。

欽明天皇の御代に百済の国から仏法が伝わり、蘇我氏がいたく敬信したことは史上よく知られているが、飛鳥時代（600年前後）和泉郷横山村の人で池辺の直氷田（ヒダ）という人が、推古天皇のおじにあたる蘇我の馬子から仏像二体を授けられ、したがう尼三人とともに家の近くに仏殿を作って奉安した。その子「徳那」もさらに弥勒菩薩観世菩薩の両尊を並べて奉安した。仏を並べて安置し奉安した所より寺名が出来、その頃建立されたのが、仏並寺だと伝えられる。近郷の人篤く敬信したる所より、地名もこれより初まったと伝わる。

日本霊異記によれば、泉州海岸高師の浜に楠の大木が流れ着き、それに刻した仏像が安置されたと伝えられるが、当時もその後の歳月に幾度かの興亡を繰り返したのであろう。その詳細はようとしてわからない。

「字上の垣外」にあったとか、現在も「池辺」氏の姓が伝わり、その子孫が存する。学僧・覚超僧都も池辺家の先祖である。古刹であるだけに仏並にまつわる話はかすみがちである。

「字上の垣外」というのは現在地のことであろう。ここでも、氷田の息子に徳那がいて、その徳那が弥勒菩薩と観音菩薩を並べて奉安したのだとする。やはり仏並寺に伝わる伝承があって、それをもとに『大阪府全志』は記述したかと思われる。ただこのパンフレットも伝承の紹介においてはなほだ遠慮がちであり、「古刹であるだけに仏並にまつわる話はかすみがちである」と控えめに記述されている。

実は、現在の歴史学は仏並が仏教受容史の上で大きな意義をもった土地であることを黙殺する。『日本書紀』や『日本霊異記』に登場する池辺直氷田の末裔である池辺氏が今なおその場に住まわれているという事実と正面から向き合うことができないのである。たとえば、地元の『和泉市史 第一巻』（1965刊）からが、それこそ優れた仏教史学者であった赤松俊秀氏の監修の下、その門下の三浦圭一氏が市史編纂室に常勤となって完成されたものだというのだが、その詳細な史料篇において他の和泉にかかわる史料については網羅し、池辺家に所蔵されていた「修善講式」も収録しているにもかかわらず、古代の池辺氏から現代の池辺





弘法大師御髮堂

氏への連続性については「可能性がないわけではなく」という以上には語らない。この姿勢は40年後の和泉市史編さん委員会編の『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』（2005刊）にも受け継がれていて、「一山寺院」としての横尾山施福寺を中心にして横山谷の歴史をたどり、市史としては画期的な優れた書物であると思われるが、やはり仏並寺と古代の池辺氏については言及を避けていて、池辺氏は後の時代に台頭した横山郷の開発領主であるかのように扱っている。

なぜなのか、首をかしげざるをえないが、思い当たることをいえば、津田左右吉以降、歴史学は『日本書紀』を読みながらも、『日本書紀』の記述を否定すること、あるいは無視することを学んでしまったのかもしれない。

### 【第三章】『日本書紀』の記事をたどって

『日本書紀』あるいは『日本靈異記』の記述をたどってみることにしよう。ただ正史である『日本書紀』の記事も確かに混乱していて、仏教伝来のこの間の歴史を正確にたどるのは、なかなか難しいことのようにも思える。まず、欽明天皇十三年（552）の冬十月に、有名な仏教伝来の記事がある。『法王帝説』・『元興寺縁起』の別伝によって、これを538年にする説もあるのは周知の通りであるが、今はしばらく問題とすまい。『日本書紀』翌十四年の記事がさしあたって問題となる。

夏五月の戊辰の朔に、河内国言さく、「泉郡の茅渟海の中に、梵音す。震音雷の声の若し。光彩しく晃り曜くこと日の色の如し。天皇、心に異しびたまひて、溝辺直（此に但に直とのみ曰ひて、名字を書かざることは、蓋し是伝へ写して誤り失へるか）を遣して、

海に入りて求訪<sup>もと</sup>めしむ。

是の時に、溝<sup>くすのき</sup>辺直、海に入りて、果して樟木の、海に浮びて玲瓏<sup>てりかかや</sup>くを見つ。遂に取りて天皇に献<sup>あ</sup>る。画工<sup>えのたくみ</sup>に命<sup>いのち</sup>して、仏像<sup>ほとけのみかた</sup>二軀<sup>ふたはしら</sup>を造らしめたまふ。今の吉野寺に、光を放ちます樟の像なり。

和泉国が河内国から分立したのは天平宝字元年（757）のことであるから、ここでは泉は河内国の一郡である。その高台からは大阪湾（茅渟海）がはるか遠く見渡せる。その海はカムヤマトイハレビコ（神武天皇）の兄弟たちが九州から攻め上って、日下の盾津で兄のイツセノミコトが痛手を負い、まっすぐには大和に入ることができずに、日の神の御子が日に向って戦うことはできないとして紀伊半島の最南端の熊野にまで迂回する、その海でもある。イツセノミコトが血に塗れた手を洗ったので、その海、すなわち大阪湾を血沼の海というようになったという語源説話が『古事記』にはある。それはあるいは夕陽を反射して赤々と染まった海からのイメージなのかも知れない。その海を遠くに見下ろすことのできるヲノウト神社がイツセノミコトを祭神とするようになるのは理解できないことではない。付言すれば、本居宣長の『古事記伝』はこの地名を説明して、黒鯛の種類にチヌという魚がいる、和名抄では海鯽魚という字を当てているが、この魚は血沼（チヌ）の海の名産であるからその地名を名にしたのだ、チヌという魚が獲れるからチヌの海というようになったという解釈は間違いだなどといっている。そのチヌの海を西方から荘厳な音楽とともに無量の光が訪れる。溝（池）辺直が海に入って確かめると、その正体は樟だったというのだが、ここにはすでに西方極楽に住まいして一切衆生を来迎する阿弥陀仏のイメージが蔵されているとあってよいであろう。前年（552）にもたらされた仏像が百済で製造されたものであったとすれば、この樟を使って日本で最初の仏像二体が作られることになる。それが、今、すなわち『日本書紀』が編纂された時期には吉野寺にあると、ここではいう。吉野比蘇寺の放光の樟の仏像である。『大阪府全志』は「本尊仏像は優秀の彫刻なり」といって、六世紀の仏像がそのまま仏並寺にあるかのような書きぶりなのだが。私は写真でしかその仏像を拝見したことはないが、『日本書紀』の記述通りであるならば、日本で最初に制作された仏像であることになる。確かに飛鳥寺の釈迦像や法隆寺の釈迦像・薬師像に共通した古風の趣のある、細面で杏型の目をした北魏様式の仏像である。そして、この記録を尊重する限り、日本で最初に作られた仏像というのは、金銅仏でも、乾漆仏でも、そして塑像でもなく、木像であったことも記憶しておかなくてはならない。

『日本書紀』のなかの池辺直の登場記事をさらに挙げることにする。敏達天皇十三年（584）のこととなる。

秋九月に、百済より来る鹿深<sup>かふか</sup>臣（名字欠せり）、弥勒の石像一軀<sup>いしのみかたひとしらすも</sup>有てり。佐伯連（名字を欠せり）、仏像<sup>ほとけのみかた</sup>一軀有てり。



是歳、蘇我馬子宿禰、其の仏像二軀を請せて、鞍部村主司馬達等・池辺直氷田を遣して、四方に使用して、修行者を訪ひ覓めしむ。是に、唯播磨国にして、僧還俗の者を得。名は高麗の恵便といふ。大臣、乃ち以て師にす。司馬達等の女嶋を度せしむ。善信尼と曰ふ（年十一歳）。又、善心尼の弟子二人を度せしむ。其の一は、漢人夜菩が女豊女、名を禪蔵尼と曰ふ。其の二は、錦織壺が女石女、名を恵善尼と曰ふ（壺、これを都符と云ふ）。馬子独り仏法に依りて、三の尼を崇ち敬ぶ。乃ち三の尼を以て、氷田直と達等とに付けて、衣食を供らしむ。仏殿を宅の東の方に経営りて、弥勒の石像を安置せまつ。三の尼を屈請せ、大会の設齋す。此の時に、達等、仏の舍利を齋食の上に得たり。即ち舍利を以て、馬子宿禰に献る。馬子宿禰、試に舍利を以て、鉄の質の中に置いて、鉄の鎚を振ひて打つ。其の質と鎚と、悉に摧け壊れぬ。而れども舍利をば摧き毀らず。又、舍利を水に投る。舍利、心の所願の隨に、水に浮び沈む。是に由りて、馬子宿禰・池辺氷田・司馬達等、仏法を深信けて、修行すること懈らず。馬子宿禰、亦、石川の宅にして、仏殿を修治る。仏法の初め、茲より作れり。

『日本書紀』の紀年をそのまま受け取るならば、欽明十四年（553）からは三十年後のことになる。百濟からの渡来人である鹿深臣がもっていた弥勒菩薩の石像と佐伯連がもっていた仏像を蘇我馬子は手に入れた。そして、池辺直氷田と鞍部村主司馬達等を諸方にやって仏法修行者を探させたが、すでに還俗していた高麗の恵便が見つかった。それを仏法の師匠としたが、さらに出家者を探して、結局のところ、司馬達等自身の娘の嶋を出家させ善信尼とよび、その弟子として漢人夜菩の娘の豊女と錦織壺の娘の石女の二人も出家させてそれぞれ禪蔵尼、恵善尼と呼んだというのである。ここに関係しているのはすべてが海外から渡来した氏族の娘びとであることとともに、日本で選ばれた最初の出家者がすべて女性であったことも注目される。出家者に戒・定・慧を求めるよりも、むしろシャーマンとしての要素が求められたのだというのは、その通りなのであろう。池辺直氷田と司馬達等は蘇我馬子の下でかいがいしく三人の尼たちの衣食の世話をし、仏法の擁護者であったことになる。あるとき、司馬達等が仏舍利を見つけて、それを鉄の質に置いて鉄の鎚で叩いても決して砕くことはできず、水に投げ入れても心中の願いのままに浮き沈みした。それを見て、いよいよ蘇我馬子・池辺氷田・司馬達等らは仏法を深く信心するようになって、馬子は石川の家に仏殿を作った。ここではこれがことさらに日本における「仏法の初め」だとしている。

そうして、翌年の敏達天皇の十四年の春二月十五日、『日本書紀』の記事をたどるならば、蘇我馬子は大野丘の北に塔を建てて法会を行った。前年に手に入れた仏舍利を塔の柱頭に蔵めた。ところが、同月の二十四日には、馬子は病気にかかる。卜者に占わせたところ、卜者は「父のときに祭りし仏神の心に崇れり」といった。仏教渡来当時、排仏派の物部尾輿・中臣鎌子らに抗して、父の蘇我稲目は百濟聖明王が贈った仏像を欽明天皇からもらい受けて向原の家を寺に改めたのだ。父の稲目が崇拜して祭った仏神の心が崇っているのだという。

そのことを敏達天皇に奏上したところ、天皇は「卜者のことばどおりに、父親が敬った神に祈るがよい」と命令をくだす。馬子が石像を礼拝して延寿を祈ったものの、疫病は世の中にさらに蔓延した。仏法がやって来たのも西方からであろうが、日本には疫病もつねに西方からやって来る。仏法は疫病をともに連れてきたのだという古代人の思惟のあり方はけっして突飛なものではないであろう。排仏派の物部守屋と中臣勝海とが立ち上がることになる。

三月の丁巳の朔に、物部弓削守屋大連と、中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何故にか臣が言を用ひ肯へたまはざる。孝天皇より、陛下に及るまでに、疫病流行りて、国の民絶ゆべし。豈専蘇我臣が仏法を興し行ふに由れるに非ずや」とまうす。詔して曰はく、「灼然なれば、仏法を断めよ」とのたまふ。

物部守屋と中臣勝海は上奏する。どうして私たちの意見を取り入れてくださらないのか。欽明天皇の代から今上陛下に代に到るまで、疫病は猖獗をきわめて、衰える気配はなく、人びとはすっかり死に絶えてしまうであろう。これもひとえに蘇我馬子が仏法を崇拝しているからではないでしょうか、と。敏達天皇は、二人のことばを認めざるを得ず、それこそ因果関係がはっきりしていると判断して、仏法を排することを命ずることになる。

丙戌に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の塔を斫り倒して、火を縦けて燔く。并て仏像と仏殿とを焼く。既にして焼く所の余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くして風ふき雨ふる。大連、被雨衣り。馬子宿禰と、従ひて行へる法の侶とを誦責めて、毀り辱むる心を生さしむ。乃ち佐伯造御室（更の名は、於閭礙）を遣して、馬子宿禰の供の善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿禰、敢へて命に違はずして、惻愴き啼泣ちつつ、尼等を喚び出して、御室に付く。有司、便に尼等の三衣を奪ひて、禁錮へて、海石榴市の亭に楚撻ちき。

古来の神々への畏怖心、あるいは神道がもっていたであろう理念はさておき、現実に今起こっている疫病の惨状が物部守屋に荒々しい行動をとらせることになる。みずから出かけて行って、胡床にどっかと腰をおろし、部下たちに命じて塔を伐り倒させ、仏堂と仏像に火を放つ。そして残った仏像を難波の堀江に投げ捨てる。この行為そのものは、流し雛、あるいは罪やけがれを移した人形を川や海に流す習俗を思わせなくもない。難波の海での祓いというのはずっと後世まで行われ、『源氏物語』の中では主人公の光までが行っている。災いをもたらした原因そのものである仏像を祓うことになる。ここで投げ棄てなくてはならなかった仏像こそが仏並寺の本尊だということになるが、まだもう少し『日本書紀』の記述を追うことにしよう。この破仏の行為に対して天は風を吹かせ、雨を降らせるが、物部守屋はそれをこととせず、雨具をまとめて活発に動いて指揮した。佐伯御室をやって蘇我馬子が供養

していた三人の尼を連れて来させ、法衣を脱がせて繁華な海石榴市で鞭打たせた。ここでは蘇我馬子は抵抗らしい抵抗をせずに、尼たちが凌辱されて連行されるのを見逃している。これではあまりに情けないが、『日本書紀』は別に或本の記録を付け加えていて、それには「物部弓削守屋大連・大三輪逆君・中臣磐余連、俱に仏法を滅さむと謀りて、寺塔を焼き、并て仏像を棄てむとす。馬子宿禰、諍ひて従はずといふ」とあり、馬子をはげしく抵抗したように記されている。

天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使とす。此の時に属りて、天皇と大連と、卒に瘡患みたまふ。故果して遣さず。橘豊日皇子に詔して曰はく、「孝天皇の勅に違ひ背くべからず。任那の政を勤め修むべし」とのたまふ。又瘡発でて死者、国に充盈てり。其の瘡を患む者言はく、「身、焼かれ、打たれ、摧かるるが如し」といひて、啼泣ちつつ死る。老も少も竊に相語りて曰はく、「是、仏像焼きまつる罪か」といふ。

敏達天皇は失った任那復興政策をとって、坂田耳子王を朝鮮半島に派遣しようとしていたが、その大事のときにあたって、天皇自身と物部守屋がともに天然痘を罹患してしまった。それゆえ、坂田耳子王の派遣は実現できず、みずからの死を予感した天皇は弟の橘豊日皇子、すなわち後の用明天皇に後事を托すことになる。任那復興は亡くなった父欽明天皇の悲願であり、われわれ子どもたちへの遺言でもあった、お前はきっとこれを成し遂げよと。しかし、天然痘は猛威をふるい続ける。身体が熱で焼かれ、激しく打たれて碎かれるようだと泣きながら訴えて、人びとは死んでいく。そして、仏像を焼いた、その罪がわが身に返ってきたのだとみなは感じて、それを口にする。

夏六月に、馬子宿禰、奏して曰さく、「臣の疾病りて、今に至るまでに癒えず。三宝の力を蒙らずは、救ひ治むべきこと難し」とまうす。是に、馬子宿禰に詔して曰はく、「汝ひとり仏法を行ふべし。余人を断めよ」とのたまふ。乃ち三の尼を以て、馬子宿禰に還し付く。馬子宿禰、受けて歓悦ぶ。未曾有と嘆きて、三の尼を頂礼む。新に精舎を営りて、迎へ入れて供養ふ。

夏の盛りに、天然痘はいよいよ猖獗を極め、蘇我馬子は自身の病勢が衰えず、今もって快方に向かわない、これはもう仏法に頼るしかない、天皇に懇願して、やっこのことで、蘇我馬子一人だけに仏法の信仰が許可される。そして捕えられ辱められていた三人の若い尼たちも馬子のもとに返される。三人はすんでのところ、日本での最初の殉教者になるところであったから、馬子はこれを歓悦して、未曾有のこととして感嘆し、そして頂礼する。これは仏をおし頂くような動作であり、僧尼を仏の化身として崇め奉る姿勢を示すのであろう。宗

教に帰依するというのは身震いするような体験であり、尋常の精神のことではない。今までの寺は焼かれてしまっていたから、新たに寺を造営して、そこで三人の尼をうやうやしく「供養」するのである。池辺直氷田もその敬虔なる信仰者である蘇我馬子の下で働く信仰者であった。

こうして、秋の八月には「天皇、病<sup>みやまいおも</sup>弥留りて、大殿に崩<sup>かむあが</sup>りましぬ」とあって、敏達天皇自身が崩御することになる。蘇我馬子は回復し、物部守屋との対決姿勢はいよいよ強まっていく。敏達天皇の殯宮でのエピソードの描きぶりが二人の関係を描いて冴えわたっている。

馬子宿禰大臣、刀を佩<sup>たち</sup>きて誅<sup>は</sup>たてまつる。物部弓削守屋大連、听<sup>あざ</sup>然而咲<sup>わら</sup>ひて曰はく、「<sup>ししや</sup>獵<sup>お</sup>箭<sup>お</sup>中<sup>すずみ</sup>へる雀<sup>すずみ</sup>鳥<sup>わら</sup>の如<sup>わら</sup>し」といふ。次に弓削守屋大連、手<sup>て</sup>脚<sup>あし</sup>揺<sup>あし</sup>き<sup>なな</sup>震<sup>ふる</sup>ひて誅<sup>は</sup>たてまつる。馬子宿禰大臣、咲<sup>わら</sup>ひて曰はく、「鈴<sup>すず</sup>を懸<sup>か</sup>くべし」といふ。是<sup>こゝ</sup>に由<sup>よ</sup>りて、二<sup>ふた</sup>の臣<sup>たり</sup>、微<sup>やうやく</sup>に怨<sup>うら</sup>恨<sup>み</sup>を生<sup>な</sup>す。

この後、もう一人の若いヒーローである聖徳太子の登場とともに、日本で最初で最後の宗教戦争の幕が切れて落とされることになる。

#### 【第四章】『日本靈異記』の説話から

さて以上は『日本書紀』の記述をたどったものであるが、池辺直氷田の名前は説話集の中にも登場する。『日本靈異記』上巻の説話を引いて見る。

##### 三宝を信敬ひて現報を得る縁 第五

大花<sup>だいけ</sup>上位<sup>じやう</sup>大部<sup>おほ</sup>屋<sup>や</sup>栖<sup>す</sup>野<sup>の</sup>古<sup>こ</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>は、紀伊<sup>きい</sup>国<sup>くに</sup>名<sup>な</sup>草<sup>くさ</sup>郡<sup>ぐん</sup>の宇<sup>う</sup>治<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>伴<sup>ばん</sup>連<sup>れん</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>先<sup>せん</sup>祖<sup>そ</sup>なり。天<sup>てん</sup>澄<sup>じやう</sup>める<sup>の</sup>情<sup>じやう</sup>ありて<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>宝<sup>ぼう</sup>を<sup>を</sup>重<sup>じゆう</sup>尊<sup>そん</sup>ぶ。本<sup>ほん</sup>記<sup>き</sup>を<sup>を</sup>案<sup>あん</sup>ふ<sup>る</sup>に<sup>に</sup>曰<sup>いは</sup>く「敏<sup>みん</sup>達<sup>だつ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>の<sup>の</sup>代<sup>だい</sup>に、和<sup>わ</sup>泉<sup>せん</sup>国<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>樂<sup>らく</sup>器<sup>き</sup>の<sup>の</sup>音<sup>おん</sup>声<sup>せい</sup>有<sup>あ</sup>り。笛<sup>ふえ</sup>と<sup>と</sup>箏<sup>そう</sup>と<sup>と</sup>琴<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>箏<sup>そう</sup>篋<sup>けつ</sup>と<sup>と</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>声<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く、或<sup>ある</sup>る<sup>は</sup>雷<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>振<sup>ふ</sup>り<sup>の</sup>動<sup>うご</sup>く<sup>が</sup>如<sup>ごと</sup>し。昼<sup>ひる</sup>は<sup>は</sup>鳴<sup>な</sup>り<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>耀<sup>あ</sup>き<sup>て</sup>東<sup>あづま</sup>を<sup>を</sup>指<sup>さ</sup>して<sup>を</sup>流<sup>なが</sup>る。大<sup>だい</sup>部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>栖<sup>す</sup>野<sup>の</sup>古<sup>こ</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>に<sup>に</sup>聞<sup>き</sup>奏<sup>そう</sup>せ<sup>ども</sup>も<sup>も</sup>嘿<sup>えい</sup>然<sup>ぜん</sup>した<sup>ま</sup>ひ<sup>て</sup>信<sup>しん</sup>ひ<sup>た</sup>ま<sup>は</sup>ず。更<sup>さら</sup>に<sup>に</sup>皇<sup>こう</sup>后<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>奏<sup>そう</sup>せ<sup>ば</sup>聞<sup>き</sup>きた<sup>ま</sup>ひ<sup>て</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>詔<sup>みこと</sup>して<sup>を</sup>曰<sup>いは</sup>く「汝<sup>なんぢ</sup>、往<sup>ゆ</sup>きて<sup>を</sup>看<sup>み</sup>よ」と<sup>の</sup>た<sup>ま</sup>ふ。詔<sup>みこと</sup>を<sup>を</sup>奉<sup>ほう</sup>り<sup>て</sup>往<sup>ゆ</sup>きて<sup>を</sup>看<sup>み</sup>る。実<sup>まこと</sup>に<sup>に</sup>聞<sup>き</sup>ける<sup>が</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>の</sup>霹<sup>ひらい</sup>靂<sup>れき</sup>に<sup>に</sup>当<sup>あた</sup>り<sup>し</sup>桶<sup>かき</sup>有<sup>あ</sup>り。還<sup>かへ</sup>り<sup>て</sup>上<sup>あ</sup>奏<sup>そう</sup>さ<sup>く</sup>「高<sup>たか</sup>脚<sup>けつ</sup>浜<sup>はま</sup>に<sup>に</sup>泊<sup>と</sup>つ。今<sup>いま</sup>屋<sup>や</sup>栖<sup>す</sup>伏<sup>ふく</sup>して<sup>を</sup>願<sup>ねが</sup>は<sup>く</sup>は<sup>は</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>造<sup>つく</sup>り<sup>た</sup>て<sup>ま</sup>つ<sup>ら</sup>む」と<sup>ま</sup>うす。皇<sup>こう</sup>后<sup>こう</sup>の<sup>の</sup>詔<sup>みこと</sup>は<sup>は</sup>く「願<sup>ねが</sup>ふ<sup>所</sup>に<sup>に</sup>依<sup>よ</sup>る<sup>べ</sup>し」と<sup>の</sup>た<sup>ま</sup>ふ。連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>詔<sup>みこと</sup>を<sup>を</sup>奉<sup>ほう</sup>り<sup>て</sup>大<sup>だい</sup>に<sup>に</sup>喜<sup>よろこ</sup>び、嶋<sup>しま</sup>大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>に<sup>に</sup>告<sup>つ</sup>げ<sup>て</sup>詔<sup>みこと</sup>を<sup>を</sup>伝<sup>つ</sup>ふ。大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>また<sup>も</sup>喜<sup>よろこ</sup>び、池<sup>い</sup>辺<sup>へん</sup>直<sup>ち</sup>氷<sup>ひ</sup>田<sup>でん</sup>を<sup>を</sup>請<sup>まね</sup>へ、仏<sup>ぶつ</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>の<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>軀<sup>く</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>彫<sup>う</sup>造<sup>つく</sup>ら<sup>し</sup>む。豊<sup>とよ</sup>浦<sup>うら</sup>堂<sup>だう</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>きて<sup>を</sup>諸<sup>しよ</sup>人<sup>にん</sup>仰<sup>おほ</sup>ぎ<sup>敬</sup>ふ。然<sup>しか</sup>う<sup>して</sup>物<sup>もの</sup>部<sup>ぶ</sup>弓<sup>きゆう</sup>削<sup>せつ</sup>守<sup>しゆう</sup>屋<sup>や</sup>大<sup>だい</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>皇<sup>こう</sup>后<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>奏<sup>そう</sup>して<sup>を</sup>曰<sup>いは</sup>さ<sup>く</sup>「おほよそ<sup>も</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>国<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>に<sup>に</sup>置<sup>お</sup>く<sup>べ</sup>か<sup>ら</sup>ず。なほ<sup>も</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>も</sup>棄<sup>す</sup>て<sup>を</sup>退<sup>ひ</sup>けよ」と<sup>ま</sup>うす。皇<sup>こう</sup>后<sup>こう</sup>聞<sup>き</sup>きて<sup>を</sup>屋<sup>や</sup>栖<sup>す</sup>古<sup>こ</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>詔<sup>みこと</sup>して<sup>を</sup>曰<sup>いは</sup>く「疾<sup>しやく</sup>に<sup>に</sup>此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>隠<sup>かく</sup>せ」と<sup>の</sup>た<sup>ま</sup>ふ。連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>詔<sup>みこと</sup>を<sup>を</sup>奉<sup>ほう</sup>り<sup>て</sup>、氷<sup>ひ</sup>田<sup>でん</sup>直<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>して<sup>を</sup>稻<sup>いな</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>藏<sup>かく</sup>さ<sup>し</sup>む。弓<sup>きゆう</sup>削<sup>せつ</sup>大<sup>だい</sup>連<sup>れん</sup>公<sup>こう</sup>火<sup>か</sup>を<sup>を</sup>放<sup>はな</sup>ち<sup>て</sup>道<sup>みち</sup>場<sup>ば</sup>を<sup>を</sup>焼<sup>や</sup>き、仏<sup>ぶつ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>将<sup>まさ</sup>ち<sup>て</sup>難<sup>なん</sup>波<sup>は</sup>の<sup>の</sup>堀<sup>ほり</sup>江<sup>え</sup>に<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>す。然<sup>しか</sup>う<sup>して</sup>屋<sup>や</sup>栖<sup>す</sup>古<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>徵<sup>せ</sup>めて<sup>を</sup>言<sup>い</sup>は<sup>く</sup>「今<sup>いま</sup>国<sup>くに</sup>家<sup>け</sup>に<sup>に</sup>災<sup>わざ</sup>起<sup>お</sup>る<sup>は</sup>、隣<sup>りん</sup>の<sup>の</sup>国<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>客<sup>きやく</sup>神<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>己<sup>おの</sup>が<sup>の</sup>国<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>に<sup>に</sup>置

くに依りてなり。斯の客神の像を出して速<sup>すみやか</sup>忽<sup>とまくに</sup>に棄て、豊国に流すべし」といふ（客神の像とは仏なり）。固く辞びて出さず。弓削大連心を狂<sup>くるほ</sup>し逆<sup>さかへ</sup>を起し、傾<sup>かたふけむこと</sup>を謀<sup>たより</sup>り便を窺ふ。爰に天<sup>そね</sup>また嫌<sup>い</sup>み地<sup>な</sup>また慥<sup>ま</sup>み、用明天皇の世に当りて、弓削大連<sup>とりひだ</sup>を挫<sup>お</sup>き、すなはち仏の像を出して後の世に伝ふ。今の世に吉野の竊<sup>ひそ</sup>寺<sup>お</sup>に安置<sup>お</sup>きて光を放つ阿弥陀の像是れなり。（以下、略）

この説話の方では主人公は人となりとして澄明な心をもった大部屋栖野古連公である。和泉の沖合の海をただよって来た音楽の音があり、それを敏達天皇に奏上したものの、天皇は沈黙してその話に取り合わなかった。そこで、後に推古天皇となる皇后の額田部皇女に奏上すると、行って調べるようにと命じる。すると、雷に当たった楠であった。屋栖野古はそれが高脚の浜に打ち上がったことを報告し、それでもって仏像を造ることを乞うて許された。それを蘇我馬子に告げると、馬子も喜んで池辺直氷田を招いて仏菩薩三体を彫造させた。「池<sup>いけ</sup>辺<sup>べ</sup>直<sup>あた</sup>氷<sup>ひ</sup>田<sup>た</sup>を請<sup>むか</sup>へ、仏<sup>ぶつ</sup>菩薩<sup>ぼさつ</sup>の三<sup>み</sup>軀<sup>しら</sup>の像<sup>みかた</sup>を彫<sup>まりつく</sup>造らしむ」というのだが、古代の記録、あるいは物語を読むとき、使役の助動詞がだれの使役を指しているのか判断するのは実のところ厄介である。池辺直氷田は彫刻士で、馬子は彫刻士の氷田に「彫造」させたというのか、そうではなく、馬子が氷田に命じたのは確かだが、氷田はまただれか彫刻士に命じて「彫造」させたのか。『日本書紀』敏達紀に池辺直氷田と並んで出て来る鞍部村主司馬達等は法隆寺金堂の釈迦三尊像を造った司馬鞍首止利の祖父であり、金銅器の製造技術者であったかに見える。それなら、それと並んで池辺直氷田もまた木工技術者、あるいはその長であったとしてもおかしくはない。仏像の木による彫刻がこのとき初めて行われるとすれば、それまで池辺直氷田はなにの彫刻を行っていたのだろうか。思いつくことと言えば、神楽の面ということになるだろうか。山間であって祭祀に使用する仮面を彫刻する技術者集団の長であったと想像して見る。その継承された木彫技術の先にこの地方に遺されたおびたしい「行基仏」や、あるいは和泉穴師神社の神像が見えて来るようにも思われる。

仏菩薩三体というからには、阿弥陀如来と観音・勢至の脇侍の二菩薩をいうのであろうが、それを豊浦寺において人びとの信仰の対象としたものの、排仏派の巨頭の物部守屋が仏像などこの国の中に置いてはならない。遠くに棄ててしまえといい、慌てた額田部皇女は屋栖古連にすぐにこの仏像を隠すように命令する。屋栖古連は池辺直氷田に命じて「稲の中に」隠させた。守屋は道場を焼き、他の仏像を難波の堀江に流し、その上で隠した仏像のあるのを知って、屋栖古連に、今、国家に災いが起こっているのは隣の国の客神の像を国の中に置いているからである。お前が隠しているこの客神の像を出してすぐに棄て、「豊国」に流すべきだという。しかし、屋栖古は拒絶して出さなかった。『日本霊異記』はもちろん仏者の立場で書かれているので、物部守屋は「心を狂し逆を起し」とあり、そのことに天も地も憎んで、用明天皇の時代には、守屋は遂には滅び去ってしまうことになる。その後、この仏像はふたたび日の目を見ることになり、吉野<sup>ひそ</sup>の竊<sup>お</sup>寺<sup>お</sup>に置かれることになったというのである。



ここで、「稲の中に」隠したところというのが、仏並ということになる。池辺氏については『新撰姓氏録』の「和泉諸蕃」に「池辺直，坂上大宿禰同祖。阿智王之後也」とあって、渡来系の氏族であり、和泉に根拠地をもっていたことがわかるが、少し気になることがないでもない。用明天皇は磐余の池辺雙槻宮に居し、法隆寺のあの有名な薬師如来像の光背銘には「池辺大宮治天下天皇」とも記されている。この池辺雙槻宮は大和国十市郡、現在の桜井市にあったと考えられる。また、『日本書紀』敏達紀には、

七年の春三月の戊辰の朔壬申日に、菟道皇女を以て、伊勢の祀に侍らしむ。即ち池辺皇子に姪されぬ。事顕れて解けぬ。

とある。この密通事件を起こした池辺皇子も実は用明天皇のことであると考えられる。はなはだ尋常ならざる事件であるが、そのことはともかく、用明天皇はすでに皇子のころから池辺の雙槻に住していて、そこで池辺皇子と呼ばれ、天皇即位とともにそこが宮となったものと考えられる。これと池辺氏はどう関わるのだろうか。『新撰姓氏録』の編纂は平安時代の弘仁六年（815）のことであり、そのときすでに池辺氏の本貫が和泉国だと記されたとしても、たとえば、もともとは大和の氏族であり、貴人の子は乳母に育てられてその姓を名とすることもあったから、用明天皇は池辺氏の女性を乳母として育てられたのではないかという想像もできないわけではない。中世の、たとえば『舞の本』の「烏帽子折」に現れる山路（用明天皇）の絵姿女房譚のエピソード、さらには近松門左衛門の『用明天皇職人鑑』に至るまで、実際の用明天皇は天然痘にかかって治世は短かったものの、たんに聖徳太子の父親だからという理由からだけではなく、気に掛かるところの多い天皇である。近松の作品はラブリーの『ガルガンチュア物語』を思い出させるようなにぎやかな、ポリフォニックな作品であり、さまざまな職人たちが用明天皇について宗教戦争で大活躍するのだが、なぜか中世の職人たちは用明（池辺）天皇との結びつきを伝承してきたようである。「金剛組」というこの当時にできたという大工集団の世界最古の株式会社が今なお大阪にはあるのだから、この伝承もおおざりにはできない。しかし、池辺氏は池辺皇子あるいは用明天皇と関わりがあったとしても、やはりもともと横山谷の人であり、自分の本貫の地に尊い仏像を隠したのであったろう。

## 【第五章】 槇尾山施福寺

仏並寺は中世にはひっそりと存在し続け、歴史の表舞台に登場することはない。だが、仏並から東槇尾川の谷を遡っていった槇尾寺施福寺が隆盛を誇った。黒田俊雄氏の「寺社勢力論」以来、中世社会における寺社の勢力は見直されているが、槇尾山施福寺は「一山寺院」として横山谷一円を支配下に置いて荘園化する。そして仏並の池辺氏は中世を通じて大規模な荘園を所有する施福寺の下司職にあった。正確にいえば、池辺氏は横山谷の開発領主であ



り、それを槇尾寺に寄進することによって、その支配権を確保したことになる。とすれば、池辺氏＝仏並寺と施福寺は別のものではなく、仏並寺は施福寺に含みこまれることになる。仏並に「槇尾山入口」のバスの停留場があるのはバス会社の恣意によるとばかりはいえない。この槇尾山施福寺については、いわゆる『槇尾山縁起（巻尾山縁起証文等之事）』（大日本仏教全書120 寺誌叢書4）があって、欽明天皇の時代の行満上人の開基を伝え、一丈六尺の弥勒菩薩像を安置したこと、また光仁天皇の時代に法海上人が九十日の安居を勤めたときに欠かさず訪れて水と花を供えた僧がいた、それが本当は観音菩薩であったので、そこで千手観音菩薩像を造立して安置したことなどが語られている。これが三十三か所廻りの対象となる観音像である。ふと「花を供えて」ということばで、川下の池田郷の「納花」という地名を思い出す。「納花」は施福寺に花を供えるための花畑があったところと伝えるからである。しかし、『槇尾山縁起』にまして施福寺の当時のありさまをよく伝えると思われるエピソードが『日本霊異記』中巻「愛欲を生し吉祥天女の像に恋ひて感応して奇しき表を示す縁 第十三」と題する説話である。

和泉国泉郡の血滄上山寺ちぬのかみのやまでらに、吉祥天女のせふぞう壻像有す。聖武天皇の御世に、信濃国の優婆塞来りて其の山寺に住む。天女の像みかた めかりうに睇ちて愛欲を生し、心を繋けて恋ひ、六時ごとに願ふ。「願はくは天女の如き容好き女を我れに賜へ」とねがふ。優婆塞夢に見て、天女の像かほよ をみなにくなか婚ふ。明日みにそ瞻れば、彼の像もの腰けがれに不浄染み汚れたり。行者視て慚愧はぢて言さく「我れ似たる女を願ふ。何すれぞかたじけな忝く天女もはらみ専み自みづから交りたまふ」とまうす。媿ぢて他人に語らざれども弟子ひそか儔に聞く。後に其の弟子みや師に礼無し。故にせ噴おめさ擯ひ去らる。里をおひいだ擯せし出され、師あらはをそら誂こと事ことを程す。里人聞き、往きて虚実を問ひ、並に彼の像をいひ瞻むれば淫精染み穢れたり。優婆塞事を隠すこと得ずして、具に陳べ語る。諒まことに委る、深く信うやまはうごば感あやきてこたておもひ応おこへずといふこと無し、と。是れ奇異あやしき事なり。涅槃經に云ふが如し「多淫たいむの人はあが画ける女おもひにおこすら欲を生ず」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

この話そのものの面白さはともかく、ここでいう血滄上山寺は槇尾山の施福寺であると考えられる。そこには遠く信濃の国から修行にやってきた優婆塞がいたことがわかる。優婆塞というからには正式に得度をして国家で認められた僧侶というわけではない。空海もまた優婆塞としてここにやって来て、勤操によって剃髪得度をしたのであった。槇尾山には多くの優婆塞たちがいて、優婆塞ながらも師匠・弟子の関係も結んで集団をつくり、修行をしていたことがわかる。

私はかつて韓国の山寺で十日ほど過ごしたことがある。私自身は住職のご好意で快適な僧坊に寝泊まりさせていただいたのだが、山林の中ではそこかしこに新たに自分で鋸や金槌をふるって小さな庵を作り、横に簡易なかまどをつくって煮炊きしながら修行をしている人たちがいた。それが日本でも古い山岳寺院のありようではなかったろうか。韓国のそうした

修行者に御馳走していただいた山菜のナムルと麦飯とみそ汁とは絶品だった。日本の仏教は葬式仏教となり（それなりの必然性があり、批判しているわけではない）、寺には墓が付随して暗く、いつも死と向き合う姿勢をもたざるをえず、特に夜間には普通の神経の人はいっしゆの恐怖感なしには過ごせない気がする。しかし、韓国の仏教は葬式仏教とは無縁であり、“memento mori”（死を忘れるな）は大切な標語であるにしても、その山林の生活は活き活きとしてすこぶる清明であり、修行者の顔もどこか突き抜けて明るかった印象がある。

もともと宗教とは人がいかに生きるべきかを追及するためのものであったはずだから、それが本来あるべき姿であり、横尾山の修行者の生活もしかつめらしい苦行の相ばかりで見るべきではないであろう。この説話でも優婆塞は性欲に苦しんでいるわけではなく、吉祥天女に向って、あなたのような美女を手に入れたいと祈願して、それを吉祥天女みずからがかなえてくれたという話である。誤解を恐れずに言えば、密教の最高經典の一つである『理趣経』は男女の交接こそが菩提であり、最高の境地であると説いている。『日本霊異記』の説話は滑稽譚ではあっても、あくまでも信仰に応じる霊異を語っているのであって、たとえばフランスのファブリオのように僧侶の墮落ぶりを嘲笑しているのではない。この説話ではまたこの寺を支える「里人」たちがいたことが注目される。それこそ横山谷の人びと、あるいは池辺氏を初めとする仏並の人びとであるはずなのである。寺と里びとは断絶してはいない。寺の修行者たちの様子について、行って尋ねることができ、不埒な行いを糾弾こそしないものの、好奇心いっばいに詮索はする。両者には積極的な交流があったように思われる。ちなみに、この吉祥天女像は現在は貝塚市王子の吉祥天園寺に移して安置されている。

『日本霊異記』の同じく中巻、「観音の木の像火の難に焼けず威く神き力を示す縁 第三十七」もやはり横尾山施福寺でのことをいうらしい。

聖武天皇の世に、泉国泉郡の部内に、珍努上山寺に正観自在菩薩の木の像を居きて敬ひ供る。時に火を失し、其の仏の殿を焼く。彼の菩薩の木の像は、焼かるる殿より二丈ばかり出でて、伏して損はるること無し。誠に知る、三宝の色にあらざること。目に見ずといふとも威力無きにあらず。此れ不思議の第一なり。

観音さまは不壊で失火などという事態は超越している。「色にあらざること。目に見ずといふとも威力無きにあらず」という表現はわかりにくいだが、横山谷は仏教受容の最初の受難の時代から仏教を守り通した仏並を含みこむ霊地であり、そこには貴い仏像があり、その仏に近づこうと努める修行者たちが集って生活をしている。空海もことさらに雌伏の地としてこの横山谷を選んだのには意味があったのであろう。『横尾山縁起』は、行満の弥勒菩薩を安置しての開基、法海の観音像の安置の話しに続けて、役の行者が『法華経』の「不軽品」を奉納したこと、また行基が卒塔婆を立てたこと、そして弘法大師がここで勤操の手によって得度したことなどを語る。縁起が弘法大師のことをことさらに語るのは、史実であるよりも弘法大師による権威づけを意図

したものだと、現在の歴史学者は考える。しかし、『御遺告』自体に槇尾山のことは触れられていて、東寺と高野山と誕生地の讃岐の善通寺を除けば、槇尾山施福寺は京都の高尾山の神護寺について、空海と深いゆかりをもつお寺だといえる。そうして次に平安時代の傑僧である覚超の話になる。



仏並寺

## 【第六章】 覚超の「修善講式」

仏並には最初に述べた通り、今でも何軒かの池辺氏のお宅があるが、この覚超が出たという本家筋の池辺氏のお宅を訪ねた。覚超の自筆の重要文化財である「修善講式」がこのお宅にはあって、今でこそ行われなくなったものの、以前は毎年九月九日には家の行事として修善講が覚超の時代以来絶やすことなく、行われていたのだという。ご主人の弘氏はすでに亡くなられていて、出て来られた御夫人と話をし、「止悪修善」という石碑と「修善講式」の納められている建物の写真を撮らせていただき、そして、池辺弘氏が1981年に発行された赤松俊秀氏著のパンフレットをいただいた。赤松俊秀氏の『続 鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店 1966）には「藤原時代浄土教と覚超」という論文が収録されている。池辺家の所蔵されていた「修善講式」の発見を紹介しながら、貴族階級の中でのこととして捉えられていた平安時代の浄土教の、山間の庶民の中での展開をたどる史料として位置づけられている。

ただ一点、厄介なことがある。『元亨釈書』の覚超伝が覚超の出自を巨勢氏と伝えることである。全文を引いてみよう。

釈の覚超、姓は巨勢氏、泉州大鳥郡の人なり。幼にして叡山に上る。奇相あり、舌を出せば鼻を過ぐ。慈慧之を見て大いに驚きて曰く「聡明の相なり。必ず国宝とならん」と。

納れて上足となす。儕輩の年少、慧の言を嫉んで諛呼して国宝と号す、故を以て人皆之を称す。慈慧の門人たるを以て兼ねて源信法師に兄事し、顕密の奥、一山之を推す。昔慈覚、二経の疏を造り、安然法師踵いで撰述に勤めたり。超、後れて出づと雖も追つて二師に則る。所謂る東西曼荼羅抄・三密抄・両界生起・仁王護国鈔等、皆学者の為に珍秘せらる。慧、徒に語つて曰く「凡そ叡峯の学者は初め顕教を習ひ後に当に密乗を受くべし」と。是を以て超力めて秘蔵を究む。嘗て月輪観を修す、其胸常に冷きこと水の如し。皇后産難あり、超に勅して持念せしむ。超、起たず。重ねて侍臣藤公に詔したまふ。公、横川に上りて嚴旨を宣べ且つ曰く「師若し山を下らずんば我れ又宮に帰らじ」と。超已むことを得ず。藤公同駕を請うも、超聴かず、徒歩して宮に入る。産誕即ち平かなり。帝大いに悦び僧都を加へたまふも、超、受けずして速に出づ。宮司背後に逐つて詔牒を読む。是れより僧都の名あり。

賛に曰く、慈慧中興の資を以て比叡に立つや、信と運とを左右と為せり。今に至るまで台道を言ふもの慧心・檀那を以て称首となす。超公は二子の間に介つて述製に従事す。此の三者は所謂る文字を以て第一義諦を揭示せる者か。

最後の賛の方からいえば、比叡山を中興した慈慧大師良源の弟子の両翼は慧信院の源信と檀那院の覚運であった。今に至るまで比叡山の天台宗はこの二人を領袖としているが、覚超はこの二人にはさまって目立たないものの、執筆に専念した。この三人は著作で以て仏教に貢献した人たちだということであろう。

さて、覚超はここでは巨勢氏であって、和泉の国の出身ではあっても、大鳥郡の出であることになっている。泉郡の横山ということにはならない。しかし、池辺氏が今なお仏並の地に家を守り、覚超出生の家として、彼の自筆の「修善講式」を伝え、その末尾には「永延三年十一月八日 願主当郷近江大掾池辺兄雄第二男延暦寺僧覚□」とあることから、覚超はやはり池辺氏であるといってよい。だからといって、『元亨釈書』の虎関師錬がまったく間違っているわけでもないようである。大鳥郡の巨勢氏を母方の家とすることもできるし、現にそのように記す文書もあるようである。覚超は幼くして比叡山に上ったというが、舌が長くて、鼻まで届くという奇相があったという。それを見て、慈慧大師良源がこの子は聡明の相があり、きっと国宝となるだろうという。この「国宝」ということばは最澄の『山家学生式』を思い出させる。七珍万宝などが国宝なのではない、学ぶ心をもった学生こそが国宝なのだというわけだが、ここで信行解すべてを具備して比叡山を背負って立つ可能性をもつ逸材だという意味なのであろう。師匠のあまりの評価に、人情として当然のことだろうが、他の弟子たちは面白くは思わなかったという。覚超の学問で特徴的なのは、比叡山では本来は顕教を優先させ、その修得後に密教を受けるべきなのに、覚超は秘蔵された密教經典の修得にも勤めたことである。月輪観を修得して、常にその胸は水のように冷んやりとしていたというのだが、もともと舌が鼻に届いたという、どうでもいいようなエピソードも、密教修

得の素質を示したものであったのであろうか。その効験の力は世間でも評判であったらしく、藤原氏の后が難産で苦しんだとき、天皇の詔勅があり、わざわざ藤原氏の大官が横川まで上って訪ねてきて、加持祈禱を頼んだのだと書かれている。覚超と紫式部は同時代人である。『源氏物語』では重篤な病や難産のたびに山の聖たちに加持祈禱を要請する。ここでふと、后ではないものの、妊娠中の葵の上が六条の御息所の生き霊に苦しめられた際の話の思い出す。能の「葵の上」ではそれこそ横川の聖が般若の面の六条の御息所の霊と対峙して調伏するのである。仏並、あるいは槇尾山施福寺の関係からいっても、また地理的な遠近からいっても、覚超は比叡山ではなく、高野山に上ってもおかしくはなかったようにも思われるのだが、この密教への傾斜にはやはり覚超が背景にもっていた横山谷の仏教の歴史があるのだとも思われる。



池辺家庭内の石碑

覚超は比叡山に行きつきりだったわけではなく、横山谷の人びとのためにもわかりやすい形で布教をした。良源一源信から受け継いだ浄土教による横山谷の人びとの結縁に努めたのである。それが「修善講式」に表れている。

此処ハ是レ部内ノ大衆ノ有縁□仏子ノ勸ニ依テ、過去・現在ノ父母・先祖・近親 并郷内ノ有縁・無縁ノ存亡ノ輩ヲ計エテ、其ノ為ニ印仏ヲ捺シ、又彼輩及自身并法界衆生平等利益ノ為ニ仏ヲ図シ経ヲ書テ卒塔婆ヲ立テ、其の基ニ件仏・経并人々名帳ヲ埋納テ、靈験ノ仏地ヲシテ毎年今日恭敬□□□奉ル処也（この部分は鎌倉本による）。

和泉郡内の有縁の人びとを勧進して過去・現在の父母・先祖・親類や郷内の有縁・無縁の人びと、亡くなった人も生きてる人も、すべてその数を数え上げてその数だけ仏の印を捺



す。また仏画を描き、経典を書写し、卒塔婆を建ててその下に仏画・経典、そして名簿を埋納する。いわゆる経塚ということになるが、そこを靈験の仏地として毎年同じ日に供養を行うということになる。ここでは法会の対象は広くは和泉郡内、絞れば池田・横山郷の人びととなるが、覚超がこれを始めたのは永延三年（989）のことであったとされる。それが池辺氏のお宅では千年ものあいだ行われ続けて来たのであった。

修善講式の後半近くには次のようなことばを唱えることになる。

今已に三宝を奉礼了ぬ、其功德无量无边也、即以此功德は自他法界平等に利益せん、就中て此郷内の有縁無縁の一切の靈等怨敵をも親友をも皆供に引導せん、現在結縁諸人各減悪業して現生後生共に安楽にして皆共に仏道成らん、大衆皆存此志して唱に随て礼拝して諸罪を懺悔して、極楽の縁を結て一生乃後には、設ひ悪道に墮とも、我は此功德を以て訴て速に解脱せんとおぼすべき者也、

南无慚愧懺悔自他所犯（七反打）

南无命終決定往生極楽（二十一反打）

すでに仏法を礼拝し終わった。その功德は無量無辺のはずであり、一切の人びとに平等に利益をおよぼし、なかんづくこの横山郷内の前世からの縁のある者もない者もその一切の靈魂について、敵同士でも親しい者同士でもすべていっしょに引導することになる。現在において成仏の縁を結んでいる者みなが悪行を消し去って、現在の生においても後生においても安楽に成仏することになる。人びとがみなその志を心にもって唱え、礼拝して犯した罪を懺悔して、極楽往生の縁を結んで、一生を終えるときには、たとえ悪い道に陥ることがあったとしても、今日のこの功德を訴えてすみやかに解脱しようと思うべきである・・・そして最後に、「ああ、自他の犯したことを恥じて懺悔する」と七回唱え、「ああ、臨終に際して極楽往生は決定している」と二十一回唱えるのである。

## 【第七章】 まとめ

『今昔物語集』第十一巻の本朝仏法部は、「聖徳太子、此朝にして、始めて仏法を弘めたる語 第一」、「行基菩薩、仏法を学びて、人を導ける語 第二」、そして「役の優婆塞、呪を誦持して、鬼神を驅へる語 第三」と展開する。最初に以後の日本の仏教のあり方を決定づける貴族仏教、庶民仏教、そして山岳仏教のそれぞれの創始者三人について語ることになるが、その三人ともに南大阪と深い関わりをもっている。四天王寺を南大阪とはいえないにしても、聖徳太子にゆかりの上太子・中太子・下太子がそうであり、物部氏との宗教戦争も河内を主戦場として戦われたとあってよい。行基の活躍舞台も後には近畿一円に広がるとしても、誕生地の堺の家原を中心とする地域といちおうは考えられるし、役の行者については、大阪と西では奈良を隔て、南では和歌山を隔てる葛城山系がその山岳跋涉の舞台であった。



日本の仏教の黎明期には南大阪が主要な舞台となり大きな役割を果たすといつてよさそうなのだが、そこに収斂し、またそこから放射する中心として仏並を位置づけると、日本の初期仏教のありようが鮮やかに浮かび上がってくるように思われる。池辺直氷田は推古天皇あるいは蘇我馬子、そして聖徳太子側に立って、仏像を仏並に隠したのだった。仏並から槇尾川を下って泉州の平野に出て、行基の活躍した堺・高石まではすぐに出られる。先に引用した『元亨釈書』では池辺氏の覚超を大鳥郡の巨勢氏かとしていたが、そこで述べたように、大鳥郡と和泉郡横山郷とは極めてありふれてしかも最適な通婚圏だったのであろう。行基が四十九院を造ったとき、その木材を供給したのは横山谷であったという伝承がある。この行基については稿をあらためて論じたいと思う。

そうして、縁起では槇尾山と役の行者との深いかかわりを説くが、仏並からまっすぐに父鬼川をさかのぼって父鬼街道（粉河街道でもある）を行けば、和泉葛城山に突き当たる。役の行者を祖とする葛城修験道とかかわりの深い山である。より正確に言えば、葛城山はいくつもあるようである。まず大阪と奈良を隔てる大和葛城山と大阪と和歌山を隔てる和泉葛城山があり、他にも金剛山の南に中葛木山があり、紀見峠の西に南葛木山がある。『葛嶺雜記』には「葛城の峯」について、次のように述べる。『日本歴史地名大系28 大阪府の地名 下』（平凡社 1986）所載のものからの引用である。

かつらきは大和のくに、限るにあらず、このみねは東南に紀の川のながれをしき、西南には友がしま、西北は海浜の山際をかぎり、東北は石川のながれをさかへ、大和川の落合よりその水上にいたりては、亀瀬といへる所にをはる。惣じて紀・泉・河・和の四か国に跨りて、行程二十八里が間の惣名なり。

地図でいえば、大和葛城山と金剛山、そして和泉葛城山を結べば逆L字形になる。それをさらに西に延ばして、先端は大阪湾の海中に入って友ヶ島に至る。北の方は大和葛城山からさらに延ばして二上山を含んで大和川の亀瀬で終わる。それらすべてが「かつらき」であり、役の行者が創始したと伝わる葛城修験道の舞台であった。行程二十八里というのには意味があって、友ヶ島から亀瀬に至るまで役の行者が法華経二十八品を一品ずつ埋めたという二十八宿が存在する。何のことはない、私の勤務する大学のある和泉市の高台からは、南の南西の犬鳴山から和泉葛城山へと和泉山脈がつらなり、岩湧山が見え、三国山に続き、北へとひとときわ高く金剛山から大和葛城山も冬には雪を頂いて見え、遠くに雌岳と雄岳の二上山も見える。パノラマとしてぼんやりと何も考えずに眺めていた風景がにわかに変質して見える。山林抖擻の修験者たちの霊山であり、聖なる山塊、サンクチュアリだったのである。美学者でもあった須田国太郎は、当時のお決まりのようにはパリになど留学せず、マドリッドに行ってスペイン絵画の技術と深い精神性に影響を受けて帰ってきた昭和の初め、和歌山高商に職があって京都から通っていたことがあるらしい。その彼が行き帰りに親しんだ「かつらき」

山系の山並みを描いた絵が何点かあって、私はその深い色調に感銘を受けたことがある。神々しいとしかいいようのない荘厳さがその絵にはあった。芸術家は山々のもつ霊性を見事にとらえていたのである。仏並は屏風のようなその山々に抱かれてある。

#### 【参考文献】

★引用は次の書物による

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系68 日本書紀 下』（岩波書店 1965）

出雲寺修校注『新日本古典文学大系30 日本霊異記』（岩波書店 1996）

『国訳一切経 和漢撰述部50 史伝部19 元亨釈書 上』（大東出版社1938 改訂版1980）

★参照した文献はできるだけ本文の中で紹介するよう心がけたが、以下の書物には論文の根幹にかかわるところで、大変にお世話になった。

和泉市史編さん委員会編『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』（和泉市 2005年）

和泉市史編纂委員会編『和泉市史 第一巻』（和泉市役所 1965 1980復刻版）

（2014年3月28日受理）

South Osaka:  
Cradle of Japanese Buddhism (1)  
Bunnami (仏並)

UMEYAMA Hideyuki

In the 6<sup>th</sup> century, the introduction of Buddhism caused very serious and critical conflicts in the ancient mentality of Japan, resulting in the first and last large-scale religious war in the history of Japan. As the main battlefield, South Osaka was the scene of various wars.

According to the “Nihon Shoki”, Ikebe no Atahi Hida carefully concealed Buddhist statues, which had been ordered to be destroyed and dumped into the sea. It is said that Bunnami is the very place where these statues were concealed. Surprisingly, the Ikebe family has survived through 15 centuries and continues to live in Bunnami even now.

Following the lead of Tsuda Sokichi, mainstream Japanese historians have been curiously skeptical about this account. “Nihon Shoki” should be particularly neglected with “Kojiki” because of the over estimation of the past totalitarian age. Neither the legends nor the traditions can be the object to be taken into considerations by the Japanese positive historians. They cannot accept the obvious fact of the presence of the Ikebe family in Bunnami.

By reviewing the “Nihon Shoki” and considering the local traditions in South Osaka, we would like to shed new light upon how the Japanese adopted Buddhism.